



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# チーム効力感に関する研究ノート

5

1. 自己効力感概念の発見
2. チーム効力感への発展
3. チーム効力感の構造
4. チーム効力感の 4 つの源泉
5. チーム効力感を発生させるには

10

### 1. 自己効力感概念の発見

自己効力感 (self-efficacy) は Bandura (1977) によって指摘された動機付けの概念の一つである。自己効力感は課題の達成に対して大きな影響を持つことが特徴である。課題達成という視点で見た場合、自己効力感を持つ人間と持たない人間では、前者の方が圧倒的に達成のパフォーマンスがよいとされている。

15

自己効力感とは、人間がある結果を達成する為に自分が首尾よく行動できるという予期に関する正の心理的感覚のことである。別の言い方をすれば「自分は目前の課題なり問題なりを達成するために必要な行動をすることができる」と思う自信感である。「通常の自信」が自分の行動で成功した過去を基礎にして持つものであるのに対して、「自己効力感」はまだ行動していない未来の成功に対して持つ。自己効力感のある状態とは、ある結果を得るために自分のこれから行うであろう行動に対して、「自分がその行動を達成することができる」という遂行可能感を持った状態のことという。

20

効力感はまだ行動をしていないことに対してその達成に影響を与える。Bandura & Wood (1989) は、自己効力感の高い人間は低い人間と比べて高い目標を設定する傾向があることを指摘している。そして自己効力感の低い人間と高い人間と同じ状況、同じ条件で物事の達成を競った場合、効力感を持つ人間の目的達成率のほうが数段優れているという点については、様々な研究で実証してきた。

25

特に教育心理学の分野では、自己効力感は人間行動の変化に直接影響を与えるとして様々な角度から研究してきた。これらの研究の結果として、学業成績と自己効力感は非

30